

戦後一足のワラジに

文人の 武蔵野

東中野に生まれた三浦朱門は、高校や勤労働員は高知、大学は本郷、入隊は千葉、職場は江古田と、武蔵野エリアを中心にいくつかの地域にゆかりがあります。しかし「故郷の感情を持つ」のは、2歳から6歳まで住んでいた武蔵野と、高円寺に移ってからの12歳から17歳まで通っていた

三浦朱門 ⑩

立川の中学までの通学路のあたりに限られていました。

武蔵野の思い出は、国木田独歩の武蔵野のイメージと結びついていました。立川の中学は小説「武蔵野インディア」に登場する旧制中学のモデルでした。中学時代には、同時代作家の中島敦、織田作之助の作品を読むとともに、「二足のワラジをはいた人」として、森鷗外、水上瀧太郎に興味を持った「そつです」。

1943年12月、学校の勉強や軍事的なことに無関心だ

三浦が幼少期を過ごした武蔵野の駅前（武蔵野市で）



った三浦は高校を無期停学になり、3学期の試験の直前に許されます。半年ほどの工場動員を経て、45年、高校を卒業し、東京大学文学部言語学科に入学します。大学は「形ばかりの授業」をして「卒業

に必要な単位の四割」をくれました。三浦は自筆年譜に「工場動員、軍隊と八月十五日の敗戦まで、私は多忙であった」と記しています。

敗戦後にできた時間を彼は「文学を楽しむディレクタン」のように遊んで暮らします。「婦人画報社の編集部に遊びに行つて、翻訳や編集の手伝いの真似事をして、時間をつぶし」、社長には「漢詩の平仄のあわせ方を習つて」いたそつです。「婦人画報」は、他の「〇〇画報」と同様に独歩が最初に編集長を務めた雑誌ですので、ここにも独歩の影響がみてとれます。

当時デザイナーとしてまた評論家として活躍していた花

森安治氏に憧れ、日本大学芸術学部で写真やデザイン、ファッションを学ぼうとしますが、父の縁もあり、日大の芸術学科で英語を教えることになりました。

48年に日大芸術学部の時間講師になった三浦は、その後も助教授、教授となり、69年に退職するまでの間、小説家と大学教員という「二足のワラジをはいた」のでした。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。